
薬を流された人々の生命線

(由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、東京、小学館、2011、p.150-166)

2013年6月21日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

津波の波が引き始めると同時に、予想通り「薬難民」が続出し、当院を訪れるようになった。薬が流されてしまったり、家に置いたまま避難所に向かった人たちで、その人たちの対応するだけで手一杯になってしまった。薬剤部スタッフの誰もが瀬戸際の危機感を持った。

高血圧・糖尿病・心臓病など慢性的な薬を求める人たちが、時間を追うごとに増えていく。避難所を回っている救護班からも、薬が不足しているという報告がくる。薬剤の不足が現実となった。

衛星電話で日赤本社へ、各地の製薬会社へ、卸会社へ、SOSを出した。しかし、交通、通信の遮断で思うようにはいかない。病院の前にある薬局にも協力を呼び掛けて、薬剤師連合を編成した。そして、とりあえず、慢性疾患の薬は、三日分しか処方しないと決めて、薬をできるだけ多くの人に手渡すようにした。

十六日には各地の日赤病院から続々と医薬品が届くようになった。しかし、薬を求めてくる人の列はなくなるらない。

それでもまだ当院に来られる人はいい。当院にカルテや処方箋がある人もいい。また、切り傷など急性期の患者への対応は、救護班に任せることができる。彼らは医師、看護師、薬剤師、事務職員でチームを組み、急性期に必要なとされる薬剤を携えている。

配慮しなければならないのは、毎日服用しなければならない薬が切れてしまった人たちだ。かかりつけの病院が津波で流されたり、薬局が被災して、薬が手に入らなくなった人たちもいるだろう。避難所において、薬のことなど言い出せないでいる人たちもいるかもしれない。自宅にいて薬がほしいといたいだが、通信も交通手段もたたれて、命の危険にさらされている人もいるはずだ。その人たちの対応について、災害医療のプロである乳腺外科部長の古田と薬剤部のそれとは共通するものだった。

「薬を持って、被災した家を回ろう」

地元の石巻薬剤師会、保険薬局みんなに協力してもらい、あらゆる薬剤、市販の薬もできるだけ集めて、それを持って、特に慢性疾患で薬を必要としている人を探して回ることにした。

同時にトイレの実態を調べる。水が出ないのだから、水洗トイレも使えないが、それをどうしのいでいるのか。汲み取り式のところは、汲み取りがなされているのか。市の下水処理施設は機能していなかったから当然ながら、汲み取りは滞っていた。事情を知ったところでトイレの消臭薬を置くこともあった。

西條美恵と板橋美絵、ミエという二人の看護係長は、今回の震災の中、ICTとして活動した。ICTとは、インфекション・コントロールチームの略で、感染症や感染制御を専門とする仕事だ。

ICTが院内を出て、地域へ、避難所へと向かったのは、地震発生後、急性期を過ぎても、下痢、発熱、嘔吐、脱水症などで受診する患者が減らず、受け入れるスタッフも疲弊してきたことから、「地域の感染をコントロールしなければ病院を訪れる患者の数は減らせない」と判断したからだ。

「それは私たちの担当でないから知らない」「そんな専門外のことはできない」という人はいなかった。災害を乗り越えていくために、様々な形の援助が、様々な場面でみられたのだ。